

教材としての瀧廉太郎に関する研究

—『四季』の教材化—

松 本 正*

【要 旨】 瀧廉太郎の音楽作品は、音楽科教育における主要教材の一角を占める。しかし、その扱いは、十分であるとは言いがたい。本稿は、学習指導要領とそれに準拠する教科書の分析を通して、瀧作品の扱いが、音楽の本質や価値に迫るものとなっていないという問題意識のもとに、彼の代表作である「花」が収められている『四季』の教材化を試みたものである。

【キーワード】 瀧廉太郎 四季 花

I はじめに

瀧廉太郎の作品は、昭和 33 年以降、共通教材として教科書教材の中に位置づいてきた。たとえば、平成元年に告示された学習指導要領では「荒城の月」、「箱根八里」、「花」が小学校の鑑賞共通教材に、「荒城の月」、「花」が中学校の歌唱共通教材に指定されてきた。平成 10 年に改訂された学習指導要領では、大きな変化が生じた。小学校の歌唱領域を除いて、共通教材の指定がなくなったのである。共通教材がなくなったとはいえ、瀧廉太郎の作品は、長年にわたって共通教材として取り扱われてきた教材である。主要教材の候補の 1 つに変わりはない。

瀧廉太郎の作品は、このように義務教育段階で主要教材の一角を占める。しかし、学校教育におけるその扱いは、後述するように十分であるとは言いがたい。つまり、そこで行われている学習活動が、音楽の本質やその音楽が持つ価値に迫るものとなっていないのである。

音楽作品は人間の社会的な営みから生み出されたものである。とすれば、それを生み出した人間の存在があるはずである。音楽においては、しばしば営みの結果のみを切り離して活動が行われている。それは音楽活動の 1 つのあり方ではある。しかし、そこからはその作品の本当の価値は見えてこない。その作品の価値がどこにあるのかを問うならば、創作の営みにまで言及する必要があるだろう。

著者は、これまで瀧廉太郎の生涯と音楽作品について研究を進めてきた。その目的の 1 つは、地域の先覚者として瀧廉太郎の業績を明らかにし、新たな人物像を構築することであった。今 1 つは、そこで得られた知見¹⁾をもとに瀧廉太郎の教材化を行うことであった。本稿は、後者に焦点を当て、瀧廉太郎の人物と作品の教材化の一環として、彼の最も意欲的な作品であると

平成 19 年 5 月 31 日受理

*まつもと・ただし 大分大学教育福祉科学部音楽科教育研究室

ともに小中学校の教材としてこれまで取り上げられてきた「花」が収録されている『四季』の教材化を試みるものである。

Ⅱ 問題の所在

上述したように、平成 10 年の学習指導要領改訂まで、瀧廉太郎の作品は、歌唱または鑑賞の共通教材として学校教育の中に位置づいてきた。共通教材が学習指導要領に導入されてから、消えるまでの、改訂ごとの瀧作品の扱いは、次のとおりである。

小学校

昭和 43 年改訂 鑑賞 5 年 滝廉太郎の歌曲

昭和 52 年改訂 鑑賞 5 年 歌曲「花」, 「荒城の月」又は「箱根八里」のうち 1 曲

平成 元年改訂 鑑賞 5 年 歌曲「荒城の月」, 歌曲「箱根八里」, 歌曲「花」のうち 1 曲

中学校

昭和 33 年改訂 歌唱 2 年「荒城の月」, 3 年「花」

昭和 44 年改訂 歌唱 3 年「花」

昭和 52 年改訂 表現 1 年「荒城の月」, 3 年「花」

平成 元年改訂 表現 2 年「荒城の月」(合唱), 3 年「花」(合唱)

瀧廉太郎の作品は、これまでの学校教育においてどのように指導されてきたのであろうか。また、平成 10 年の学習指導要領の改訂により、その指導がどのように変化したのであろうか。瀧廉太郎の教材化の前提として、このことを明らかにしておきたい。そのために、これまで行われてきた瀧の作品に関わる指導の拠り所となっていた学習指導要領として、共通教材が消える前の平成元年告示の学習指導要領とそれに準拠して作成された教科書の検討を行う。同様に、共通教材の指定がなくなったことに伴い、指導内容がどのように変化したのかを明らかにするために、平成 10 年改訂の学習指導要領と教科書に言及する。²⁾ 以上の作業をもとに、教材化という視点から見た際の瀧廉太郎に関する指導内容について、若干の問題点の指摘を試みたい。

まず、小学校である。平成元年告示の学習指導要領では、5 年生の鑑賞領域の内容において、瀧の作品は共通教材として「歌曲「荒城の月」, 歌曲「箱根八里」, 歌曲「花」のうち 1 曲」となっている。この内容を受ける形で、教科書では、いずれも、合唱の響きを味わうとともに声種を感じ取らせることを目的に、演奏形態の違いという観点から瀧の作品を取り上げるようになっていく。具体的には「花」が二部合唱, 「荒城の月」が混声合唱, 「箱根八里」が男声合唱である。要するに、具体的な合唱の種類と声の種類との組み合わせを感得させるように構成されているのである。このような構成となっているのは、指導要領の他の指導内容である「楽器の音色及び人の声の特徴に気を付けて聴くこと。また、それらの音や声の重なりによる響きを味わって聴くこと」や取り扱う鑑賞教材の「独唱及び合唱を含めたいろいろな演奏形態による楽曲」と連動している結果でもある。

平成 10 年に改訂された小学校学習指導要領では、鑑賞の共通教材の指定がなくなった。これにより、教科書での扱いに若干の変化が出てきた。「荒城の月」と「箱根八里」を表現教材の日本の歌として掲載する教科書が現れた。しかし、学習指導要領の指導内容は、ほぼ従前どお

りであり、他の教科書は、改訂前を踏襲したものとなっている。

これを教育内容と教材という関係で整理してみよう。教育内容に何を設定するかによって瀧廉太郎作品の扱いも異なってくるからである。上記の場合、教育内容に相当するのは「合唱の響き」であり「声種」であって、「花」や「荒城の月」、「箱根八里」は言うまでもなく教材である。この視点でもって教科書を見てみると、ここには教育内容に相当するものがもう1つ存在している。それは、「瀧廉太郎」そのものである。声種を教えながら、副次的に瀧廉太郎の3つの作品を教えるという二重構造になっているのである。

ここに問題が生じる。「合唱の響き」、「声種」だけでなく、「瀧廉太郎」が教育内容となっているために、本来、独唱曲であるはずの「荒城の月」を混声合唱曲として扱わなければならない。さらに、学習の中心は「合唱の響き」、「声種」であるために、瀧廉太郎については表面的な扱いにならざるを得ない。つまり、瀧廉太郎作品の本質に迫るような学習にはなっていないのである。瀧廉太郎を扱うのであれば、少なくとも彼の音楽の本質に迫る扱いが必要である。

次に、中学校についてである。中学校では表現教材として瀧の作品を扱うようになっている。

平成元年の学習指導要領における表現領域では、「歌唱教材として、次の共通教材を含めること」とあって、第2学年では「荒城の月」が、第3学年では「花」が指定されている。

平成10年の改訂により、中学校においても共通教材の指定がなくなった。その代わりに歌唱教材に関して、以下のような教材選択の観点が示された。

- (ア) 我が国で長く歌われ親しまれているもの
- (イ) 我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの
- (ウ) 我が国の文化や日本語のもつ美しさを味わえるもの

「荒城の月」や「花」は、まさに上記の観点到該当する教材である。共通教材の指定がなくなったとはいえ、長年にわたって共通教材として取り上げられ、教材としての評価はある程度定まっており、有力な歌唱教材の候補であることには違いない。したがって、平成10年の改訂で、共通教材はなくなりしたが、改訂後の教科書においてもこの2曲は引き続き掲載されている。ただし、「荒城の月」は合唱用に編曲されたものではなく、学習指導要領の教材選択の視点に即して、日本の歌として、あるいは愛唱歌として、旋律のみで掲載されるようになった。

表現教材の指導は、一般的には表現活動を中心としながらも、その作品が作曲された背景、作曲家などについて触れていく必要がある。つまり、我が国における洋楽史上の作曲家の一人として瀧廉太郎について何らかの形で扱っていくことになる。教科書を見てもそのような記載の仕方、つまり、教材曲とともに、創作の背景や作曲者に関する情報が最低限、提供されるようになっている。しかし、これでは、瀧の簡単な生涯に触れるとともに、どういう作品を生み出したのかという事実の単なる情報提供に終わってしまう可能性が高い。学習指導要領に基づく教科書の記述としては、これが限界であろう。

現在の音楽科教育における問題の1つは、教える側が、学習内容の必要性を子どもたちがどれだけ感じているかに無頓着であるということである。つまり、「荒城の月」や「花」を、なぜ歌うのかということについて、子どもたちに対して十分に答えてはいないのである。なぜその作品を表現するのかということに答えるためには、その作品が、歌い継がれてきた名曲であるという理由からだけでなく、なぜ歌い継がれ、なぜ名曲なのか、ということにまで切り込んで

いかなければならない。その作品がもつ歴史的価値や瀧廉太郎の音楽の本質に迫ることが必要なのである。

本稿における『四季』の教材化の試みは、以上のような問題意識に基づいている。

Ⅲ 『四季』成立と日本の洋楽史における意義

瀧廉太郎の代表作「花」が収められた『四季』は、瀧廉太郎 21 歳、音楽学校研究科 3 年生在学中に出版された曲集である。「花」を含めて「納涼」、「月」、「雪」の 4 曲から構成される。なぜ瀧は『四季』を創作したのであろうか。この問題に迫るために、『四季』誕生に至るまでの瀧の創作活動と『四季』創作へと彼を突き動かした音楽史的な背景について言及しておく必要がある。

瀧廉太郎の音楽作品は、全部で 34 曲が確認されている。制作年代によって大きく次の 3 期に分けることができる。

第1期 音楽学校専修部時代

「日本男児」、「春の海」、「散歩」、「命を捨てて」

第2期 音楽学校研究科時代

「我神州」、「四季の滝」、『四季』（「花」、「納涼」、「月」、「雪」）、「メヌエット」、「荒城の月」、「箱根八里」、「豊太閤」、『幼稚園唱歌』（「お正月」、「鳩ぼっぼ」、「水あそび」など 16 曲）

第3期 ドイツ留学帰国後

「別れの歌」、「水のゆくえ」、「荒磯の波」、「憾」

1 第1期の創作活動

瀧廉太郎は、明治 27 年に音楽学校の予科に入学し、翌 28 年 9 月、本科専修部に進学する。第 1 期の創作活動は、明治 30 年、専修部の 2 年から 3 年生にかけてである。明治 30 年 3 月に『おむかく』に発表した最初の作品「日本男児」をはじめとして、「春の海」、「散歩」、「命を捨てて」の 4 曲が、初期の作品として確認されている。この時期の彼の作品の特徴の 1 つは、まず、軍歌調の唱歌であるということである。明治 27 年に勃発した日清戦争を社会的背景として当時軍歌が流行していたが、彼の作品もそうした時流を反映したものとなっている。今 1 つの特徴として、いずれも伴奏が付されていないことがあげられる。旋律による作品発表は、当時の一般的な形式である。瀧は作品を発表するに当り、当時の一般的形式に倣ったにすぎないが、しかし、そこにはそれ以上に、西洋音楽導入段階にある我が国の音楽界の実情があったからに他ならない。

西洋音楽が導入された初期の段階の唱歌は、歌詞は日本語によるものであったが、旋律は外国のものに頼らざるを得なかった。邦人の手によって旋律の創作が可能となってくるのは、明治 20 年代になってからである。この時代になると、外国曲の旋律が多く借用される一方で、歌詞・旋律ともに純国産の唱歌が次々と生み出されるようになり、唱歌集として多数出版される。そして、唱歌は一大流行する。しかし、日本人で伴奏まで付すことのできる人材は、まだ現れていなかったのである。当時の作曲といえば、唱歌の旋律を作ることが作曲であり、瀧廉太郎もその例外ではなかったのである。

それを支えるべき制度的整備も全く立ち遅れていた。当時の洋楽界を概観してみるならば、東京音楽学校が明治 20 年に創設され、音楽の専門家と音楽教師の本格的養成が始まっていたが、そのカリキュラムに作曲はまだ位置づいていない。わずかに本科専修部 3 年生の和声学の中に楽曲製作法が設けられているにすぎなかった。本科に作曲の設置を見るのは、昭和 7 年まで待たなければならない。この時代、創作の領域で新たに生み出されるものは、伴奏のない単旋律の唱歌や軍歌のみで、邦人の手による芸術作品の創造は皆無であった。

2 『四季』の洋楽史における意義

第 2 期は、音楽学校の研究科時代である。初期の作品群の後、彼は創作の筆を休め、次の作品の発表まで約 3 年間の空白期間をおく。再び創作活動を開始するのは、明治 33 年になってからである。「花」、「荒城の月」、「箱根八里」、「お正月」など今日知られている作品の大半がこの時代に生み出されている。「花」が収載されている『四季』は、その最初の作品である。なお、「我神州」という作品が明治 32 年に発表されているが、この作品は、「日本男児」の改作である。したがって、内容としては、第 1 期の延長線上にあるものである。

この頃の瀧廉太郎は、明治 31 年には音楽学校をすでに首席で卒業し、さらに研鑽を積むためにその上の研究科に籍を置きながら、音楽学校の授業嘱託として後進の指導にあっていた。ピアノの演奏家としても名前が知られ、脂が乗りかかっていたところである。しかしながら、作曲家としては、まだ全くの無名であった。そこに突如として発表されたのが『四季』である。『四季』の発表は、2 つの側面において衝撃的な意味を持つ。1 つは、彼自身の創作歴の側面において、もう 1 つは、すでに述べた当時の創作領域における実情の側面においてである。

『四季』発表までの瀧廉太郎の創作歴としては、軍歌調の単旋律の唱歌があるのみである。そうした作曲家の、次に発表した作品というのが、これまで邦人作曲家では誰も作ったことのない本格的な曲集ということであり、作品の登場はあまりにも突然で、驚きとしか言いようがない。第 1 の側面である。

したがって、邦人作曲家による本格的芸術作品の登場は、当時の音楽界に大きな衝撃を与えたことが容易に想像できる。これが第 2 の側面である。この作品が持つ歴史的意味合いは、まさに後者の衝撃にある。

では、第 2 期の最初の作品である『四季』は、洋楽史上どのような位置づけを持っているのであろうか。また、ここに込められた創作の意図は、どのようなものであったのだろうか。その手掛かりとなるものが『四季』の序文である。当時の音楽のあり方に対する瀧廉太郎自らの考えが示された数少ない記述である。これを手掛かりに『四季』の持つ洋楽史上の位置づけに言及してみよう。

「近来音楽は、著しき進歩発達をなし、歌曲の作世に顕はれたるもの少しとせず。然れども是等多くは通常音楽の普及伝播を旨とせる学校唱歌にして、之より程度の高きものは極めて少し、其稍高尚なるものに至りては、皆西洋の歌曲を採り、之が歌詞に代ふるに我歌詞を以てし、単に字句の数を割当るに止まるが故に、多くは原曲の妙味を害ふに至る。中には頗る其原曲の声調に合へるものなきにしもあらずと雖も、素より変則の仕方なれば、これを以て完美したりと称し難き事は何人も承知する所なり。余や敢て其欠を補ふの任に當るに足らずと雖も、常に此事を遺憾とするが故に、これ迄研究せし結果、即我歌詞に基

きて作曲したるものゝ内二三を公にし、以て此道に資する所あらんとす。幸に先輩識者の是正を賜はるあらば、余の幸栄之に過ぎざるなり。」

瀧廉太郎が「歌曲の作世に顕はれたるもの少しとせず」と述べているように、明治 20 年代から 30 年代初頭にかけて多くの歌が世に送り出されていたが、その大半は唱歌であった。それは「音楽の普及伝播」を目的とするものであって、芸術を追求するものではなかった。

西洋の旋律を借用してきて新たに日本の歌詞を付すという手法は、西洋音楽導入の初期の段階から取られた方法であることは、すでに言及したところである。したがって、瀧廉太郎が述べるように、より高尚な音楽作品ということになると、日本語の歌詞による西洋の芸術作品に求めざるを得なかったのである。ただ、これも、「単に字句の数を割当るに止まるが故に」と瀧が指摘するように、多くの場合、原語の歌詞が本来持っているところの持ち味が損なわれていたのである。

以上のような状況を打破し、日本人の手による芸術作品の創作によって、我が国の西洋音楽を方向づけようとして発表した作品が『四季』であったのである。

Ⅳ 『四季』の音楽的特徴と教材化の視点

上記のように、唱歌全盛の時代に瀧廉太郎が目指した本格的な芸術作品の創作は、『四季』において、具体的にどのように実現されていったのであろうか。次に、『四季』の各作品の音楽的な特徴を整理しておきたい。

1 「花」

イ長調、4 分の 2 拍子からなる二部合唱曲で、明るく軽やかな曲調は、我が国における西洋音楽の曙を思わせる歌である。歌詞は 3 番までであるが、それぞれ旋律が変化しているところに大きな特徴がある。1 番の歌詞に対して、2 番では「あびて」の旋律が、3 番では 2 節の「くるれば」のリズムと 3 節の「げにいっこく」のリズム、ならびに 4 節の「ながめをなにととおべき」の旋律が異なっている。言葉の持つイントネーションやリズムへの配慮がすでに窺える。

また、演奏方法についても歌詞による違いが見られる。1 番と 3 番が合唱になっているのに対して、2 番では、前半がアルト、後半がソプラノの斉唱になっている。

2 「納涼」

イ長調、8 分の 6 拍子の独唱曲である。「花」と同様に 3 番までである歌詞の旋律が異なっている。1 番の歌詞の旋律がイ長調であるのに対して、2 番ではイ短調というように調性を変えることで曲の雰囲気を変化させて、3 番で再びイ長調に戻る。しかし、旋律は 1 番と同じ動きをとらない。3 番の歌詞の後半の第 3 節と 4 節は転調し、1 番の旋律とも動きを異にする。それに合わせて伴奏の形も変化している。一般的な歌では歌詞の 1 番だけを取り出して歌うということが可能であるが、「花」にしても「納涼」にしても、そうした歌い方はできない。3 番まで通して歌うことにより、音楽表現として完結するように作られている。

もう 1 つ、この作品の素晴らしいところは、旋律と伴奏の関係である。1 番と 3 番の歌詞の伴奏は、小刻みなリズムの繰り返しである。そのリズムに性格の異なる、ゆったりとした大きな

流れの旋律を乗せ、何ともいえぬ情趣を作り出している。全く性格の異なる2つのものを巧みに組み合わせることによって、一種独特の表現を作り出すことに成功しているのである。

3 「月」

ハ短調、8分の6拍子で、無伴奏の混声四部合唱曲。中間部は平行調への転調が見られる。楽式的には3部からなり、それに2小節の終結部が付加される。終結部の「こえのかなしき」のrit.からフェルマータの着いたピカルディー3度に至る終止は、この曲の情感が最高潮に達する部分である。今日では、山田耕筰が大正13年に伴奏付の独唱曲に編曲したものが歌われることが多い。

4 「雪」

ホ長調、4分の4拍子の混声四部合唱曲で、3部から構成される。伴奏楽器に特徴があり、ピアノに加えてオルガンが使用されている。オルガンは、中間部を除いて、ピアノとほぼ重なっているが、主として和声に厚みを出すために使用されている。

中間部ではゼクェンツの手法が使用されており、バスに現れた旋律が他声部に受け継がれながら緊張感を増し、ハ短調への一時的な転調によるクライマックスへと到達する。

以上、『四季』に収められている個々の作品の音楽的特徴を見てきた。いずれも表現形態が異なっていると同時に、創作上の技法に工夫が凝らされている。『四季』の曲集全体としての音楽上の特徴をまとめてみると、次の4点に集約できる。

- ・ 2曲に伴奏が付されている。
- ・ 合唱曲が3曲占めている。
- ・ 4曲の演奏形態がすべて異なっている。
- ・ 「花」、「納涼」に見られるように、歌詞の違いによる旋律の違いがある。

この4点に加えて、個々の作品における創作技法上の工夫により、結果として、4曲が異なった豊かな表現を実現している。当時としては並ぶものない卓越した彼の音楽的力量を示すものであると同時に、これまでの唱歌にはなかった新しい日本の歌のあり方を世に問うものとなっている。

上記の4点は、いずれも当時の唱歌には見られない特徴である。つまり、当時流行していた唱歌との相違点でもある。ここから『四季』の教材化にあたっての視点を導き出すことができる。つまり、『四季』の教材化にあたっては、唱歌との違いを浮き彫りにするということである。そのためには、当時の唱歌の一般的特徴を把握したうえで、『四季』の音楽的特徴の理解を行う。『四季』の音楽的特徴の理解は、さらに、『四季』の曲集全体としての音楽的特徴の理解と個々の作品における音楽的特徴の理解に分けられる。教材化の中心となる部分である。これによって『四季』という作品の歴史的な意味の理解に結び付けていくことができる。

V 授業プラン「瀧廉太郎 新しい歌の創造」

以上のような『四季』の音楽的特徴を踏まえて教材化したものが、授業プラン「瀧廉太郎 新しい歌の創造」である。授業目標は『『四季』を通して、瀧廉太郎の歌の本質と歴史的意義を理解する』である。対象学年は中学校2年生、指導計画は1時間である。

授業プランは、5つの学習活動から構成される。学習活動ごとに「学習活動のねらい」と具体的な指導過程として「教師の働きかけと指導上の留意点」を示す。「教師の働きかけと指導上の留意点」は、発問、指示、説明等の教師の主要な指導言、および指導方法、指導上の留意点、補足説明等から構成されている。

以下、授業プランである。

1 学習活動1：瀧廉太郎の初期の音楽作品を通して当時の唱歌の特徴を理解する

〔学習活動のねらい〕

瀧廉太郎が公に発表した最初の作品「日本男児」を使用し、軍歌調であること、伴奏がないことを理解する。既述のように、瀧廉太郎の初期の作品は、当時の邦人の手により生み出された唱歌の典型を示すものであり、これを取り上げることによって、当時の唱歌の特徴の把握に結びつけていく。さらには、そこから当時の社会における音楽状況の把握へと導く。同時に瀧廉太郎の初期の作品がどのようなものであったのかということについても理解することが可能となる。

〔教師の働きかけと指導上の留意点〕

瀧廉太郎が最初に作った曲を聴きます。瀧廉太郎が音楽学校時代の明治30年に「おんがく」という雑誌に発表した作品です。最初の頃、彼はどのような曲を作っていたのでしょうか。

- ★ 「日本男児」を聴かせる。
- ★ 歌詞内容から、軍歌調の唱歌であるということを導き出し、以下のような内容を説明する。
 - ・明治27年（音楽学校に入学した年）に勃発した日清戦争を社会的背景として多くの軍歌がつくられ、流行しており、この作品もそれを反映したものとなっている。

この歌には、もう1つ特徴があります。それは何でしょうか。

- ★ もう一度、聴きながら考えさせ、伴奏がないということに気づかせ、次のような内容を説明する。
 - ・明治になって西洋音楽が我が国に入ってきたが、最初の頃の歌は、大半が外国のメロディー3)に日本の歌詞を当てはめたもので、メロディーはまだ自分たちでは作れなかった。
 - ・それが可能となったのは、明治20年代に入ってからで、次々に新しい唱歌集が出版されるようになり、唱歌が一大流行するが、日本人で伴奏まで作れる人物は、まだいなかった。
 - ・当時の作曲といえば、唱歌のメロディーを作るというのが作曲であり、瀧廉太郎もその例外ではなかった。
- ★ 同時期の作品として「散歩」をさらに聴かせる。タイトルは「散歩」となっているが、勇ましく軍歌調の作品であるとともに、伴奏も付されていない。

2 学習活動2：作曲をしなかった空白の期間の理由を考える

〔学習活動のねらい〕

瀧廉太郎の創作活動は、初期の作品群の後、つまり、第1期と第2期の間に3年間の空白期がある。その間、彼は演奏会出演などで力量を高め、当時としては優れたピアノの演奏家であったことを理解する。

〔教師の働きかけと指導上の留意点〕

このように瀧廉太郎は、最初の頃、伴奏のない軍歌調の唱歌を作っていました。ところが、彼は、急に音楽を作るのをやめてしまいます。次に新しい音楽を作曲するのは、3年後の明治33年です。つまり、3年もの間、彼は曲を作っていないのです。せっかく曲を作り始めたのに、やめてしまった、これはいったいどうしてでしょうか。理由を考えてみましょう。

- ★ 意見を発表させた後に、次のような内容を説明する。
 - ・ 瀧廉太郎が初めてピアノの独奏をしたのは、音楽学校に入ってから2年目の明治29年で、この時、ラインベルガー（ドイツの作曲家）の「バラード」という曲を演奏した。この初めての独奏をきっかけに、彼は様々な演奏会に出演するようになった。
 - ・ 空白の3年間は、もっぱら演奏会に出演し、音楽の力を蓄えていた。自分の力量のなさに気がついた彼は、軍歌のような作品を作っていたのでは駄目だと感じた。
- ★ 瀧廉太郎は、明治31年に首席で東京音楽学校を卒業する。彼が音楽家として頭角を現すのは、本科専修部の最高学年3年生の頃からである。最初は作曲ではなく、ピアノ奏者として注目される。彼は、多くの演奏会に出演し、在世中はピアノ奏者としての評判が高かった。作曲家としての評価は、後世の評価に負うところが大きい。

3 学習活動3：『四季』の演奏形態の違いを把握する

〔学習活動のねらい〕

プリントを使用しながら、『四季』の4つの作品の演奏形態がそれぞれ異なっていることを理解する。

〔教師の働きかけと指導上の留意点〕

さて、瀧廉太郎は自分の力量のなさに気づき、演奏を通して音楽の力を蓄えていました。そして、3年がたち、明治33年に突如として発表された作品が、曲集『四季』です。春夏秋冬の4曲（花、納涼、月、雪）から構成される曲集です。

この頃の瀧廉太郎はというと、音楽学校をすでに首席で卒業をして、さらにその上の研究科というところに籍を置きながら、音楽学校の教師をしていました。ピアノの演奏家としても名前が知られていました。今の年齢にして21歳、ちょうど脂が乗りかかってきたところです。しかしながら、作曲家としては、まだ全くの無名でした。それまで軍歌のようなメロディーだけのごく簡単な歌を作っていた作曲家が次に発表した作品というのが、これまで日本人では誰も作ったことのない本格的な曲集なのですから、驚きです。

では、さっそく『四季』を聴いてみたいと思います。4曲の中でよく知られているのは「花」ですが、今日は「花」だけでなく、他の3曲（「納涼」、「月」、「雪」）も一緒に聴きます。

- ★ 資料1のようなプリントを配布し、3つの観点、①声の種類（女声か男声か混声か）、②

歌い方（独唱か合唱か）、③伴奏（伴奏があるかないか）から聴くことを説明する。③については、伴奏楽器も記入させる。

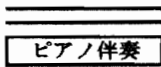
- ★ 4つの作品は、いずれもそれほど長くはない。したがって、4曲すべてを取り上げることができる。ただし、演奏形態の把握が目的であるので、歌詞が3番まである「花」と「納涼」については、1番の歌詞のみとする。
- ★ 3つの観点で聴き取ったことを確認し、それぞれ演奏形態が違うということ、それが瀧廉太郎の新しい音楽への挑戦の姿であると同時に、彼の音楽に対する主張の現れであるということを理解させる。
- ★ まとめとして、資料2のような演奏形態を図式化したものを示し、説明を行う。

資料1 プリント『四季』の音楽的特徴

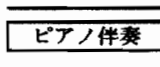
1. 「花」		
①声の種類	a. 女声	b. 男声 c. 女声と男声
②歌い方	a. 独唱	b. 合唱
③伴奏	a. あり（楽器名	） b. なし
2. 「納涼」		
①声の種類	a. 女声	b. 男声 c. 女声と男声
②歌い方	a. 独唱	b. 合唱
③伴奏	a. あり（楽器名	） b. なし
3. 「月」		
①声の種類	a. 女声	b. 男声 c. 女声と男声
②歌い方	a. 独唱	b. 合唱
③伴奏	a. あり（楽器名	） b. なし
4. 「雪」		
①声の種類	a. 女声	b. 男声 c. 女声と男声
②歌い方	a. 独唱	b. 合唱
③伴奏	a. あり（楽器名	） b. なし

資料2 『四季』の演奏形態

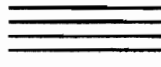
① 花



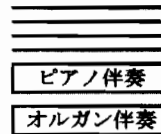
② 納涼



③ 月



④ 雪



4 学習活動4：『四季』の序文から、『四季』を作曲した理由を考える

〔学習活動のねらい〕

瀧廉太郎が抱いていた、当時の唱歌作出の方法に対する問題意識を扱うことで、彼の音楽に対する考え方に迫っていく。その際、「皆西洋の歌曲を採り、之が歌詞に代ふるに我歌詞を以てし、単に字句の数を割当るに止まる」の具体的事例として、スコットランド民謡の「蛍の光」を教材として使用する。

〔教師の働きかけと指導上の留意点〕

では、瀧廉太郎は、どうして『四季』を作曲したのでしょうか。『四季』の序文に、彼は、このように書いています。唱歌は、その程度の高いものは非常に少ない。やや高尚なものは、どれも西洋のメロディーを借りてきて、元の歌詞の代りに日本語の歌詞を作り、当てはめているだけなので、多くの曲が原曲の持ち味を損ねている、と。

このように、外国の曲に、元の歌詞とは関係ない日本語の歌詞を使用することは、当

時よく用いられてきた方法です。その例を示しましょう。たとえば、「蛍の光」です。明治初期に日本に入ってきた歌です。さて、この歌の歌詞は、何番まであるでしょうか。また、どういう歌詞内容の歌でしょうか。

- ★ 現在、歌われている歌詞の番号（2番）と歌詞内容を確認する。

「蛍の光」は、現在、卒業生を送る歌、別れの歌として2番までの歌詞で歌われていますが、本来は4番まであります。3、4番の歌詞から見た「蛍の光」は、何を歌った歌でしょうか。

- ★ 「蛍の光」は、明治14年に我が国で初めて小学生を対象として出版された『小学唱歌集』（音楽取調掛編）に収められている。
- ★ 3、4番の歌詞を紹介し、本来の歌詞内容を考えさせ、「蛍の光」がただ単に別れを歌った歌ではなく、国を護る若者への期待が込められた歌であることを理解させる。

3番	つくしのきわみ	みちのおく	4番	千島のおくも	おきなはも
	うみやまとほく	へだつとも		やしまのうちの	まもりなり
	そのまごころは	へだてなく		いたらんくくに	いさおしく
	ひとつにつくせ	くにのため		つとめよわがせ	つつがなく

- ★ さらに、原曲のスコットランド民謡の歌詞を紹介し、幼馴染の友人同士が杯を傾けながら、かつての楽しき日々を追憶するという内容であること、歌詞の意味するところが日本語の歌詞とは異なっていることを説明する。⁴⁾
- ★ 次のような内容の話をして、この活動のまとめとする。
- ・これまでの我が国における歌の作り方は、西洋のメロディーを借りてきて、元の歌詞の代りに日本語の歌詞を作り、当てはめていただけなので、多くの曲が原曲の持ち味を損ねていた。このような状況に対して、瀧廉太郎は、日本人が作った歌詞に日本人が曲を付ける、それによって音楽が改良される、芸術作品が生まれる、と考えた。そして、その結果として生まれたのが『四季』である。

5 学習活動5：「納涼」の音楽的特徴を理解する

〔学習活動のねらい〕

『四季』の中から「納涼」を取り上げ、瀧廉太郎の創作上の試みをより具体的に理解する。活動のポイントは、歌詞に応じてメロディーを変化させている点を把握することである。

〔教師の働きかけと指導上の留意点〕

『四季』が当時の唱歌と違って素晴らしいということは、以上のように演奏形態を見ただけでも分かりますが、この中の1つ1つの歌を見ていくともっとよく分かります。今日はこの中から「納涼」を取り上げて、もう少し詳しくお話ししましょう。

先程は1番の歌詞のみを聴きましたが、この曲の歌詞は、3番まであります。多くの曲は、歌詞が3番までであるとする、同じ1つのメロディーで1番から3番まで歌うというのが普通です。ところが、この曲は1番から3番までメロディーが変化しています。

当時の唱歌では全く見られないことです。

プリントを見てください。1番から3番までのメロディーの違いが分かるように4小節ずつ区切って並べたものです。違うところはどこでしょう。

- ★ 歌詞に応じてメロディーを変化させていることを理解させるために、譜例1のような、1番から3番までのメロディーを比較しやすいようにした楽譜を準備する。2番と3番のメロディーについて、1番のメロディーと異なっているところを生徒に指摘させる。
- ★ 生徒の音楽の知識や音楽的能力の獲得状況によっては、こうした楽譜の使用が難しい場合もある。その時には、歌詞のみを載せたプリントを用意し、それをもとに教師がピアノでメロディーや伴奏を弾きながら進めていくという方法が考えられる。
- ★ 異なっている箇所をピアノで弾きながら確認する。
- ★ この活動では、よく知られている「花」を使用することも可能である。5)

譜例1 納涼

A

① ひきまのーあつきのなごりみせてー

② やけたもーままごきいつかりえてー

③ 下すみじーこしひかりありそうみのー

B

① ほのおぜーもえたつゆうべのーくもこ

② しおがぜー下すしくのたさひーそそー

③ なみにもーたわむれつそじうーたいー

C

① くないせめなすいるひのかげー

② ちもすそふろがてのこりまひほー

③ ふがふくよるさえわすれはててー

D

① なみまじーおつるやまきもくーれぬー

② むせくろーしらなみあしおそー

③ あそぶもたのーしかなつづのらあてー

それでは、もう一度、「納涼」を聴きます。歌詞によるメロディーの変化に注目しながら聴いてください。

- ★ 3番の歌詞まで聴く。
- ★ 最後に、次のような内容の話をして授業のまとめとする。
 - ・『四季』は、一言で言えば西洋音楽である。しかし、ただ単に西洋音楽をまねただけの音楽ではない。「花」とか「納涼」といった日本的な題材と融合させて、我が国における西洋音楽のあり方、新しい日本の歌のあり方を提案した曲集である。そうしたことから、日本の芸術歌曲の原点は『四季』であると言ってよい。

VI おわりに

本稿では、瀧廉太郎研究で得られた知見をもとに、義務教育段階における瀧廉太郎作品の扱いが、音楽の本質やその音楽が持つ価値に迫るものとなっていないという問題意識のもとに、『四季』の教材化の試みを提示した。本稿で示した授業プランは、あくまで教材化の1例に過ぎない。

瀧廉太郎の作品は多くの場合、歌唱教材として扱われる。本プランは、単独に使用することを想定して作成されているが、歌唱活動と組み合わせて用いることも可能である。その場合は、より効果的な学習活動を期待できる。

冒頭で述べたように、筆者は、瀧廉太郎の人物と作品の教材化を目指している。『四季』の教材化はその一部をなすものである。瀧廉太郎には『四季』以外にも「荒城の月」や「お正月」といったよく知られた作品がある。これらの作品も瀧廉太郎の音楽に迫るための主要な教材となりうる。その教材化については今後の課題である。

注および参考文献

- 1) これまでの瀧廉太郎研究の成果は、以下の文献に収められている。
 - ・安永武一郎監修，松本正編集『瀧廉太郎資料集』大分県先哲叢書，大分県教育委員会，平成6年
 - ・松本正『瀧廉太郎』大分県先哲叢書，大分県教育委員会，平成7年
 - ・松本正「名曲『荒城の月』に関する研究」，大分大学教育福祉科学部研究紀要第23巻第1号，平成13年4月
- 2) 検討の対象とした教科書は，小学校が3社（教育芸術社，教育出版，東京書籍），中学校が2社（教育芸術社，教育出版）である。
- 3) 本稿では基本的に「旋律」という用語を用いているが，授業プランにおいては生徒を対象とするため，日常的に使用頻度が高く，親しみがある「メロディー」を使用している。
- 4) 原詩は，詩人ロバート・バーンズの“Auld Lang Syne”によるもので，歌詞は，次のように5番からなっている（猪間驥一『なつかしい歌の物語』音楽之友社，昭和42年，pp200-201）。

- | | |
|--|---|
| 1番 永いおなじみが 忘れりよか
思い出さずに おらりようか
はるかに 過ぎた日 思い出で
盃を，友よ あげようよ | 2番 きみは相当に 飲けるのだから
ぼくも十分に いただくとしよ
はるかに 過ぎた日 思い出で
盃を，友よ あげようよ |
| 3番 ふたりで野山を 駆けまわり
雛菊をつんだ ことがあったね
それからこのかた おたがいに
けわしい山坂 こえてきた | 4番 ふたりで小川を わたりあるき
朝から晩まで 遊んだっけね
それからこのかた おたがいに
海ばらはるけく へだててた |
| 5番 さあさ，おたがいに 手をとろう
その酒は グーっと 乾したまえや
はるかに 過ぎた日 おもい出で
盃を，友よ あげようよ | |

- 5) 「花」についても「納涼」と同様の楽譜を用意することが考えられるが，ここでは異なった

方法を示しておく。たとえば、譜例 2 のような、主旋律を取り出して図形にした楽譜を利用する。図形譜では、3 番まである歌詞がそれぞれ A～D の 4 つの部分に区切られており、それぞれの部分に 1 箇所だけ違いがある。その違いを探すのである。五線譜の場合、子どもたちがそこから旋律の違いを見出すことはかなりの困難を伴う。そこで、目的に応じた図形譜を用意するのである。

譜例 2 花の図形譜

	A	B	C	D
1				
	はーるのうらーらの すーみーだげわ	のーぼりくだーりーの ふーなびとが	かーいの しずーくも はなーとちる	なーがめをなーにーに たーとおべき
2				
	みずやあけーぼーの つーゆーあびて	わーれにものーいーう さーくらを	みーずや ゆうーぐれ てをーのべて	われましまーぬーく あおーやぶを
3				
	にーしきおーりーす ちょーうーいでに	くーるればのーぼーる おーぼろづき	げにーいーこくも せんきんの	なーがめをなーにーに たーとおべき

A Study on TAKI Rentaro as Teaching Material

—Construction of Teaching Process about “Shiki”—

MATSUMOTO, Tadashi

Abstract

TAKI Rentaro's musical works occupy one corner of the main teaching materials in school music education. However, as a result of analyzing the Course of Study and the textbook based on it, it turned out that the instruction was insufficient. In the instruction of his musical works, it is necessary to teach the essence of his music and the value which his music has. Therefore, in this paper I aimed at producing a teaching material based on "Shiki" which is his masterpiece.

【Key words】 TAKI Rentaro, Shiki, Hana